元寇750年
―モンゴル人はじつは参戦していなかった!?

東洋文庫研究員／モンゴル史学者
宮脇 淳子

■「蒙古襲来」から「元寇」へ名称が変わる

二〇二四年は、第一次「蒙古襲来」つまり「文永の役」から七五〇年です。教科書にあるように「元寇」と言われるようになったのは、明治時代になってからです。

はじめて「元寇」と書いたのは、江戸時代に水戸藩の徳川光圀が編纂を始めた『大日本史』ですが、一八九四～九五年の日清戦争直前に『元寇』という歌が作られ、人びとの間でよく歌われて、それからこの言葉が浸透しました。

幕末に日本が開国したあと明治になって、おとなりの清国と日清修好条規、李氏朝鮮と日鮮修好条規を結んだあと、かつて日本人が「倭寇」という海賊行為をしたとさんざん非難されました。それで日本人は、その前に元や高麗が先に攻めてきたのではないか、と「元寇」という言い方を好んで使うようになったのです。「寇」は、古い日本語では使われることはなかった漢字です。

歴史的用語としては「蒙古襲来」が正しく、つい最近まで、日本海側では新潟のほうまで、子供が悪いことをすると「ムクリ・コクリ（モンゴル・高句麗）が来るよ」と脅したそうですから、「蒙古」は人びとの間に怖い記憶として残っていたわけです。

「蒙古」という漢字は、「くらい・ふるい」と悪い意味なので、現代のモンゴル人はこの言葉を嫌がります。中国人が「支那」は蔑称だというのと同じです。漢字も知らない野蛮人の名前には、わざと悪い意味の漢字を当てるというシナの古い文化が原因なので、戦後、東京外国語大学は「モンゴル語科」と改めましたし、日本とモンゴル関係は、「日モ関係」と書きます。

私は歴史家なので、鎌倉時代の同時代史料に出てくる「蒙古襲来」のほうが用語としては正しい、と最近まで考えていたのですが、いまでは「元寇」のほうがいい、と思っています。その理由は、遊牧民である「モンゴル人」は、海を渡って日本には来なかった、と思うからです。

■日本に来たのは、高麗人と女直人

遊牧民は泳げません（戦前、チベット人とモンゴル人が多く住む、いまの中国青海省を踏査した日本人探検家の旅行記に、モンゴル人に扮していたのに、河を泳いだせいでバレた、という話があります）。ヒツジも食べられない朝鮮半島を徒歩で縦断して、海の上に浮かびたいわけがありません。

遊牧民はだいたい自分の一族を連れて、中央アジアやロシア草原に向かいました。

それでは日本に襲来したモンゴル軍は、どのような人で構成されていたのでしょうか。

『元史』「日本伝」によりますと、第一次日本遠征軍の内訳は、屯田軍・女直（女真）軍・水軍で構成された元の征討軍が一万五千人です。高麗の歴史書である『東国通鑑』によりますと、この他に、高麗軍八千人、舟の櫓を漕ぐ水手、水先案内を務める引海、そして船頭の役割をする梢工などの高麗人が六千七百人、総勢三万人弱でした。

■『世界史のなかの蒙古襲来』（扶桑社新書）

じつは元の征討軍の中にもたくさんの高麗人が混じっていました。なぜなら、一二三一年から五九年までの三十年間にモンゴル軍は六回も高麗に侵入し、計六十万人もの高麗人を鴨緑江の北側につれて帰って農業をさせていたからです。

元の日本征討軍の副司令官・洪茶丘は、一二三一年に初めてモンゴル軍が高麗に侵入したとき、真っ先にモンゴルに投降した洪福源の息子です。高麗二世だった洪茶丘が率いた元軍は、ほぼ高麗人だったに違いありません。

■元軍の最高指揮官も遊牧民ではない

元軍の最高指揮官は、「日本征討都元帥」という肩書きのヒンドゥ（忻都）という人ですが、この人は、素性がよくわからない人物です。

ヒンドゥという名は、ヒンズー、すなわち、「インド」という意味ですが、「インド」という名前だからといって、インド人とは限りません。ではモンゴル人らしい名前なのかというと、そうでもありません。

ヒンドゥは、八百名近い人名が掲載されている『元史』の「列伝」に名前がなく、『元史』のどの部分にも登場しません。ヒンドゥがもし、フビライの親戚の誰かの娘を嫁にでももらったような大将軍であれば、必ず、名前や背景や履歴などが「列伝」に残るはずです。

「列伝」はいわば元の中央官庁の家来の記録なので、モンゴル人でなくても、家来として地位が高ければ列伝があります（前述の高麗人の洪福源だって名前があります）。

ヒンドゥは、『高麗史』の公主クトルグケルミシュ（フビライの娘で、高麗の二十五代忠烈王に嫁入りしました）の伝のところに、屯田経略使として名前が出てきます。つまり彼は、いまの北朝鮮の北部で、屯田兵を監督する長官だったのです。

こういうわけで、元の世祖フビライが命じたのは史実ですが、「元寇」に遊牧民であるモンゴル人は参加しなかったと私は思うのです。